



ろく たん ばた  
六反畑遺跡Ⅱ

県道下山妙琴原線改良工事に伴う  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1995年

長野県飯田市教育委員会

## 序

飯田市は、山紫水明の自然環境に恵まれ、原始・古代より、連綿と多くの人々が生活を営んできた地域であります。近年、全国的に進められている開発工事は、この飯田市においても、例外ではなく、現在まで保存されてきた埋蔵文化財が破壊されつつあります。しかし、地域社会の発展を考える上では、発掘調査を行い、記録保存によって埋蔵文化財を後世に残すことはやむを得ないことと考えております。

発掘調査によって、先人たちの生活の様子を示す事実が最近次々と確認されています。これらの事実一つ一つの積み重ねにより、地域の歴史の再構築が行われ、ひいてはその成果が現在の私達の生活に還元されるものであります。

今回発掘調査を実施した六反畑遺跡は、飯田市鼎切石地区に所在し、約8000年前から人々が生活していた遺跡です。昭和63年度に民間開発に伴う発掘調査により古墳時代の竪穴住居址と縄文時代の土坑が発見され、今回の調査でも古墳時代の竪穴住居址1軒などが発見されました。

最後になりましたが調査実施にあたり文化財保護の本旨に厚いご理解を賜った長野県飯田建設事務所、地元の皆様、現地・整理作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を申し述べる次第であります。

平成5年2月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

## 例 言

1. 本報告書は県単街路事業・下山妙琴原線改良工事に伴い実施された、飯田市鼎切石所在の埋蔵文化財包蔵地六反畑遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は長野県飯田建設事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成5年度現地作業を、6年度整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 発掘調査及び整理作業は、一貫して遺跡名に略号、RTB4052を用いた。
5. 発掘調査位置は国土基本図の区画、LC-84に位置し（社団法人日本測量協会1969「国土基本図図式 同適用規定」参照）、グリッド設定は株式会社ジャステックに委託した。
6. 本書の記載については、住居址・溝址・ピットの順とした。遺構図・遺物図は本文と併せ挿図とし、写真図版は本文末に一括した。
7. 本書は、調査員全体で検討の上、吉川金利が執筆・編集を行い、小林正春が総括した。
8. 本書に掲載した図面類の整理は、吉川悦子が、遺物の実測は吉川が行った。
9. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、それぞれの深さ（単位cm）を表わしている。
10. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
I 調査の経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	2
II 遺跡の環境	3
1. 自然環境	3
2. 歴史環境	3
III 調査の結果	9
1. 竪穴住居址	9
① 3号住居址	
2. 溝状址	11
① 溝状址 1	
3. ビット	11
IV まとめ	14
引用参考文献	15
報告書抄録	16

# 挿 図 目 次

挿図 1. 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	4
挿図 2. 調査位置及び周辺地図	5
挿図 3. 基準メッシュ図区画調査位置図	6
挿図 4. 遺構全体図	4
挿図 5. 3号住居址出土遺物	9
挿図 6. 3号住居址	10
挿図 7. 溝状址 1 出土遺物	11
挿図 8. 溝状址 1	12

## 写真図版目次

- 図版1 六反畑遺跡全景・3号住居址
- 図版2 3号住居址カマド断ち割り・溝状地1
- 図版3 溝状址1土層断面・3号住居址出土遺物
- 図版4 溝状址1出土遺物・調査スナップ

# I 調査の経過

## 1. 調査に至るまでの経過

六反畑遺跡は飯田市鼎切石地籍に所在する。

高速交通時代の到来と共に、近年飯田市は急速に道路環境が整備されつつある。特に鼎地区では渋滞緩和を目指し、中央自動車道とアクセスする一般国道153号飯田バイパス建設が急ピッチで進められている。また、飯田市街地と西部地域を結ぶ市道知久町中村線（通称運動公園通り）が昭和62年度完成し、地域の振興、整備が図られつつある。

一方、幹線道路の整備と共に、周辺の県・市道の改良も進み、県道下山妙琴原線も市道知久町中村線と交差する道路の一つである。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地、六反畑遺跡にあたり、昭和63年度に店舗建設に伴う発掘調査の際に、古墳時代後期竪穴住居址2軒と、縄文時代後～晩期土坑68基、それに伴う遺物多数が検出された。これらの調査結果を勘案し、平成5年7月12日県教育委員会文化課の立会いを受け現地協議を実施した結果、試掘調査を行い遺構・遺物が確認された場合、本調査を行うこととなった。

同10月18日、拡幅部分に試掘坑を設定し調査した結果、南東部に焼土・溝状の遺構を確認した。北西部は遺構・遺物等が確認されなかった。よって、遺構を検出した南東部、36㎡を本調査することとなった。

## 2. 調査の経過

試掘結果に基づき、平成5年10月27日本調査に着手した。重機により表土を除去した後、遺構の検出作業を行った。その結果、調査区南東端に1件の竪穴住居址、北西端に溝状址、中央部にピットを検出し順次調査した後、写真撮影・測量を行い、10月29日に現地作業を終了した。

平成6年度に飯田考古資料館において、遺物・図面の整理を行い、報告書作成にあたった。

### 3. 調査組織

#### (1) 調査団

調査担当者 小林正春 馬場保之

調査員 佐々木嘉和 佐合英治(～6. 3) 吉川豊 山下誠一(6. 4～) 吉川金利  
渋谷恵美子(～6. 3) 福澤好晃 下平博行 伊藤尚志(6. 10～)

作業員 新井ゆり子 池田幸子 今村治子 金井照子 金井三佳子 北沢直子 木下早苗  
木下玲子 桐生八千代 小平不二子 小平峯子 小林千枝 斎藤千里 斎藤徳子  
佐藤知代子 沢柳藤夫 田中恵子 田中智子 中島真弓 中平隆雄 丹羽啓子  
丹羽由美 萩原弘枝 樋本宣子 古根素子 牧内修 松下直市 松島直美  
松島なみ 松村かつみ 松本恭子 溝上清見 宮内真理子 吉川悦子 吉川小夜子

#### (2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野 節 (社会教育課長～6. 3)  
横田 稔 (同上6. 4～)  
原田吉樹 ( " 文化係長～6. 3)  
小林正春 ( " 文化係長6. 4～)  
岡田茂子 ( " 社会教育係)  
吉川 豊 ( " 文化係)  
山下誠一 ( " " 6. 4～)  
馬場保之 ( " " )  
吉川金利 ( " " )  
渋谷恵美子 ( " " ～6. 3)  
福澤好晃 ( " " )  
下平博行 ( " " )  
伊藤尚志 ( " " 6. 10～)



## II 遺跡の環境

### 1. 自然環境

六反畑遺跡は、長野県飯田市鼎切石に所在する。飯田市は、西を木曾山脈、東を赤石山脈と伊那山脈に挟まれた伊那谷の南部に位置し、天竜川による河岸段丘が著しく発達した地域である。飯田市域では、この河岸段丘がさらに大小の支流により開折され、扇状地・河岸段丘・小盆地が複雑に入り組み、変化にとんだ地形が形成されている。鼎地区は、天竜川の支流松川の形成する氾濫原と河岸段丘、扇状地の上に広がる地域である。

当遺跡は、松川により形成された河岸段丘のうちの低位段丘に属する上山・切石段丘面上に位置する。遺跡の南側には、松川流域河岸段丘を低位段丘面と中・高位段丘とに分ける、比高差25mの段丘崖があり、松川寄りの北側にも比高差10m程の段丘崖があり地形が区切られる。南側の段丘崖下には、湧水線の存在が知られている。北東側へは上山・切石段丘面が松川の上流に向かって狭まりながら伸び、南東側は松川と天竜川の合流地点に向かって開けている。遺跡は標高約490mの微高地を中心に広がり、この微高地上のごく緩やかな南東斜面が今回の調査地点にあたる。

今次調査時点は六反畑遺跡東側の微高地南東縁辺に位置し、黒色土の発達した湧水地帯から砂礫混じりの微高地に移行する際にあたる。地形的諸条件に恵まれ、生活を営むに適した地であったといえよう。

### 2. 歴史環境 (挿図1)

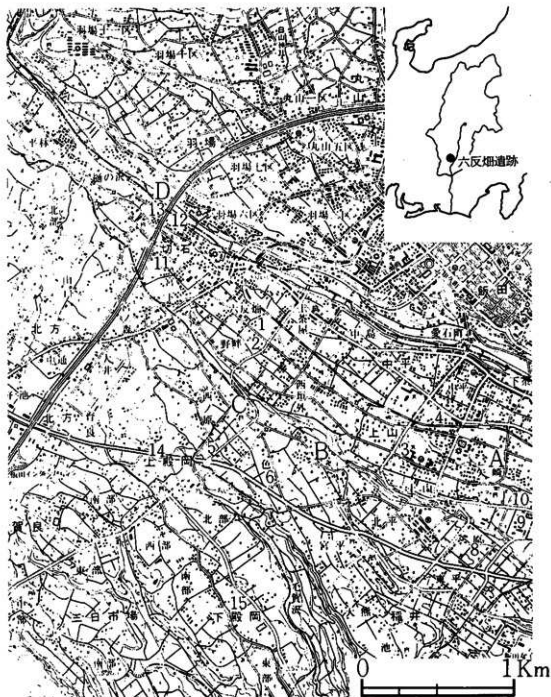
六反畑遺跡(1)の所在する鼎地区の中で確認された最も古い遺跡は断片的ではあるが、天伯B遺跡(12)と猿小場遺跡(9)から旧石器時代のナイフ形石器が出土している。

縄文時代早期の遺物を出土した遺跡としては、天伯A遺跡(13)のほかに、六反畑遺跡(1)があり、量としては僅かであるが、押型文系土器群と条痕文系土器群の資料が得られている。

縄文時代前期の資料については確実な確認例はないが、縄文時代中期になると、低位段丘面上に立地する天伯A遺跡(13)などで、大規模な集落址の一部が調査されている。

縄文時代後・晩期の遺跡で住居址が調査された例は少なく、猿小場遺跡(9)、六反畑遺跡(1)、天伯A遺跡(13)から縄文時代後期及び晩期の遺物が出土している。

弥生時代後期になると集落址の調査例が急増する。後期前半には、猿小場遺跡(9)、山岸遺跡(11)で住居址が調査されている。後期後半では、調査面積の大小、遺跡範囲内での調査区

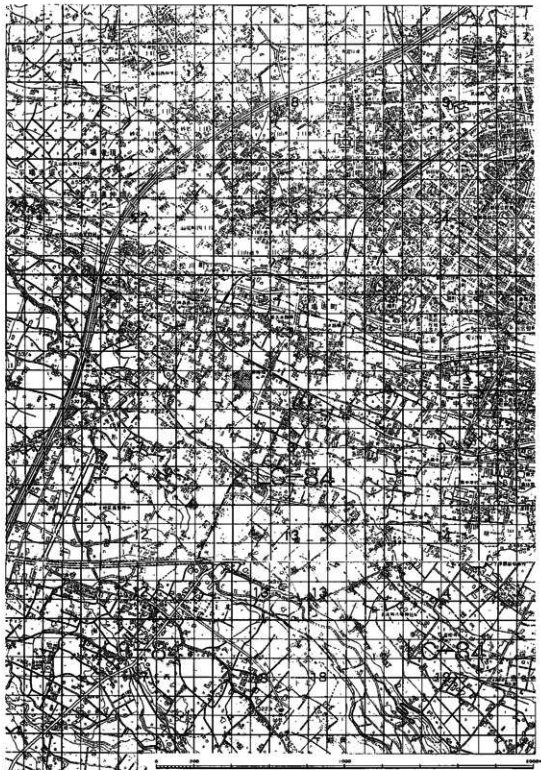


- |          |          |           |           |             |
|----------|----------|-----------|-----------|-------------|
| 1. 六反畑遺跡 | 5. 田井座遺跡 | 9. 猿小場遺跡  | 13. 天伯A遺跡 | A. 鞍骨古墳     |
| 2. 日向田遺跡 | 6. 一色遺跡  | 10. 矢高原遺跡 | 14. 殿原遺跡  | B. 須山古墳     |
| 3. 柳添遺跡  | 7. 名古熊遺跡 | 11. 山岸遺跡  | 15. 下原遺跡  | C. 西の原古墳    |
| 4. 黒河内遺跡 | 8. 地藏面遺跡 | 12. 天伯遺跡  |           | D. 天伯1・2号古墳 |

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図2 調査位置図及び周辺地図



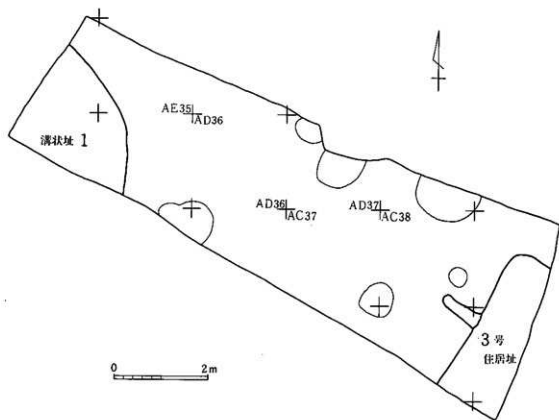
挿図3 基準メッシュ図区画調査位置図

位置などの問題はあるが、調査区内に住居址が密集する大規模な集落址と、住居址が散在する集落址という2つの傾向が見られる。前者には低位段丘面上の山岸遺跡(11)に代表され、後者は高位段丘面上から扇状地上に多く、猿小場遺跡(9)があげられる。

古墳時代後期になると調査事例が増加する。この時期の大規模な集落址としては、低位段丘面上の山岸遺跡(11)、天伯B遺跡(12)、六反畑遺跡(1)、黒河内遺跡(4)で集落址が調査されている。

古墳時代の遺跡としては、集落址以外に特徴的なものとして古墳がある。鼎地区には、現在埋没したものも含め14基の古墳が知られている。詳しく調査された古墳は、割竹形木棺を有する壘穴式の主体部を持つ5世紀後半の古墳である物見塚古墳と、後期古墳である天伯1・2号墳(D)がある。

古墳時代後期を含め奈良・平安時代以降は、隣接する伊賀良地区に、東山道の経路と「育良駅」の所在地、荘園を構成する村落の起源などの問題を考える上で注目すべき点があり、当鼎地区においてもそれらとの関連を考える必要がある。



挿図4 遺構全体図



### Ⅲ 調査結果

今次の調査において確認された遺構は以下のとおりである。

竪穴住居址 1軒

溝状址 1条

ピット

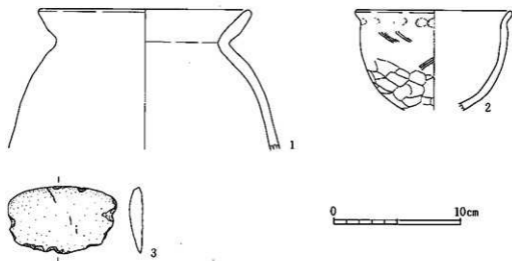
#### 1. 竪穴住居址

##### ①3号住居址(挿図5・6)

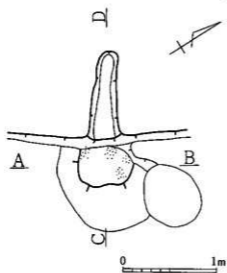
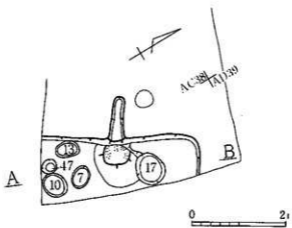
A B39を中心として検出した。南東側が調査区外となり、約 $\frac{1}{4}$ 程を調査した。規模は不明であるが、主軸方向は $N61^{\circ}W$ を示す。壁高は7cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は灰色粘質土で軟弱である。支柱穴は確認できなかった。カマドは北西壁中央に位置すると思われ、粘土カマドである。上部は削平されている。

遺物は少なく、多くが覆土中から出土し、甕(5-1)は床面直上で、坏(5-2)は覆土中より出土している。横刃形石器(5-3)は流れ込みの遺物と考えられる。

出土遺物より古墳時代後期に位置づけられる。



挿図5 3号住居址出土遺物



1. 黑色土
2. 烧土
3. 灰色土混黑色土
4. 灰色粘质土 (搅乱)
5. 烧土混黑色土
6. 黑褐色土 (烧土含む)



插图6 3号住居址

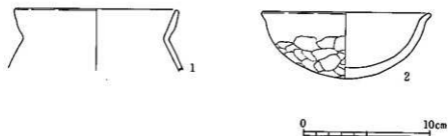


## 2. 溝 状 址

### ①溝状址1 (挿図7・8)

AD35を中心として検出し、極僅か調査した。規模・方向等は不明であるが、検出部分でL字状に南に曲がる。断面形は様々である。断面形及び土層堆積より、自然流路と考えられ、北西から南に流れている。

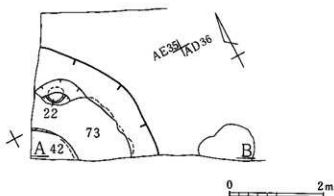
遺物は覆土上層より中近世陶磁器が、下層より甕(7-1)、坏(7-2)が出土している。主体となる出土遺物より古墳時代後期に位置づけられる。



挿図7 溝状址1 出土遺物

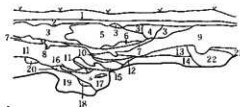
## 3. ピット (挿図9)

調査区中央部で検出した。性格・時期等不明である。遺物は出土しなかった。個々の説明は省略するが、遺構図はすべて掲載してある。



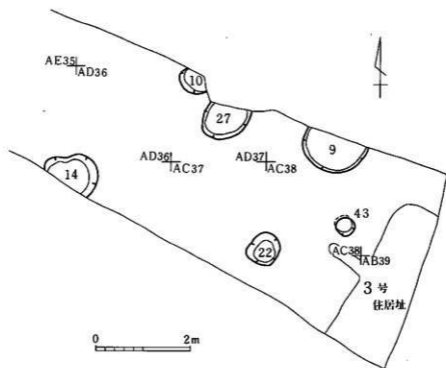
A 49000

B



1. 耕土
2. 耕土（鉄分が沈澱する）
3. 暗灰黄褐色砂質土
4. 灰黄褐色砂質土
5. 明灰褐色砂礫土（ $\phi 0.5\text{cm}$ 礫入る）
6. 暗灰褐色砂土
7. 暗乳白色砂土（粒子が非常に細かく、鉄分マーブル状に混じる）
8. 明灰褐色砂土
9. 黒褐色砂質土（3がブロック状に混じる）
10. 灰黒褐色砂質土
11. 灰黒褐色砂質土（3がブロック状に混じる）
12. 灰黒褐色砂質土（黄褐色砂土がマーブル状に混じる）
13. 黒褐色砂質土（暗褐色土がブロック状に混じる）
14. 黒褐色砂質土（ $\phi 0.5\text{cm}$ 礫多少混じる）
15. 暗灰色砂土（6より粒子荒く、11がマーブル状に混じる）
16. 灰色砂土
17. 暗灰色砂礫土（ $\phi 1\sim 10\text{cm}$ 礫混じる）
18. 灰黒色砂土（15がマーブル状に混じる）
19. 明灰褐色砂礫土（ $\phi 0.3\text{cm}$ 礫入る 5より粒子荒い）
20. 明灰褐色砂礫土（19が混じる）
21. 暗褐色砂質土
22. 暗褐色粘質土

挿図8 溝状址1



挿図9 ビット

## IV ま と め

六反畑遺跡の調査結果は以上のとおりであるが、時代毎の概要を記して今次調査のまとめとしたい。

### (1) 縄文時代

該期の遺構・遺物は、今次調査では確認できなかった。昭和63年次調査において検出・確認された後期～晩期の遺構・遺物に関しては、最近出土例が僅かながら増加し、中村中平遺跡（飯田市教育委員会 1994）・北方大原遺跡（飯田市教育委員会 1995）に詳しい。

本遺跡南側に隣接する、微高地上に営まれた日向田遺跡（飯田市教育委員会 1985・1990・1994）では、縄文時代中期の石組炉及び遺物が確認されており、集落の展開が考えられる。今後の調査の成果が期待される。

### (2) 弥生時代

昭和63年次調査と同様、主要な遺構・遺物は確認できなかった。しかし、前述した日向田遺跡において後期の竪穴住居址が2軒確認されている。両遺跡とも調査範囲が限定され詳細は不明であるが、両遺跡の間（六反畑遺跡の南側）にある湿地帯が生産域と推定でき、今後の調査結果が待たれるところである。

### (3) 古墳時代

今次調査において主体となる時代である。3号住居址は古墳時代後期に比定され、天伯B遺跡（日本道路公団名古屋建設事務局・長野県教育委員会 1975）29号住居址出土土器に類例が認められる。また、溝状址1出土遺物は、前の原遺跡（飯田市教育委員会 1990）26号住居址に類例が認められる。両者の関係は調査面積・遺物出土量の関係等より詳細は不明であるが、出土遺物はほぼ同時期と思われる。なお、昭和63年次調査においても同時期の竪穴住居址が確認されている。

### (4) 奈良時代以降

当該期の遺構・遺物は検出されなかった。

時代毎の概要は前述のとおりであるが、本遺跡が所在する鼎切石・上山地区は、今後開発が急激に押し寄せると思われるので、注意が必要である。

## 《引用・参考文献》

- 飯田市教育委員会 1989 『六反畑遺跡』  
飯田市教育委員会 1990 『前の原遺跡』  
飯田市教育委員会 1990 『日向田遺跡Ⅱ』  
飯田市教育委員会 1994 『日向田遺跡Ⅲ』  
飯田市教育委員会 1994 『中村中平遺跡』  
飯田市教育委員会 1995 『北方大原遺跡』刊行予定  
日本道路公団名古屋建設事務局・長野県教育委員会 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』-下伊那郡鼎町その2・天伯A-  
下伊那史編纂委員会 1991 『下伊那史』第1巻  
長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編 遺構・遺物

## 報告書抄録

ふりがな	ろくたんばたいせき
書名	六反畑遺跡Ⅱ
副書名	県道下山妙琴原線改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	吉川金利
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎(0265)53-4545
発行年月日	1995年2月20日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ろくたんばた 六反畑遺跡	飯田市鼎 切石4052 地	35° 30' 33"	137° 48' 38"	平成5年 10月18日   10月29日	36㎡	道路改良
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
ろくたんばた 六反畑遺跡	集落址	古墳時代	住居址 1軒 溝状址 1条	土師器	飯田市教育委員会 1989 『六反畑遺跡』	

写 真 图 版

図版 1



六反畑遺跡全景



3号住居址





3号住居址カマド断ち割り



溝状址 1



溝状址1土層断面



3号住居址出土遺物



溝状址 1 出土遺物



調査スナップ

---

## 六反畑遺跡Ⅱ

県道下山妙琴原線改良工事に伴う  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1995年2月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地  
飯田市教委員会  
印刷 龍共印刷株式会社

---

